

日置・壬生吉志と氷川神社

—古代の方位信仰を手がかりとして—

木本雅康

- I. はじめに
- II. 日置について
- III. 吉志について
- IV. 日置と吉志
- V. おわりに

I. はじめに

近年、歴史地理学の分野において、《方位》に対する関心が高まっている。例えば山田安彦¹⁾は、冬至や夏至の日の出・日没方位に注目して、それらが、古代の地域計画と密接に結びついていることを、藤原京や諸国府、胆沢城、平泉館などを事例として論じた。筆者も、山田が言う二至の太陽出没方位を手がかりとして、武蔵国足立郡の氷川3社の配置の問題を取り上げることにする。

享保12(1727)年、徳川吉宗は、武蔵国足立郡に存在した「見沼」と称する広大な沼地を干拓させた。そのかつての見沼のほとりであった所に、氷川神社(大宮市高鼻町)、氷川女体神社(浦和市三室)、中山神社(旧称中氷川神社・大宮市中川)の氷川3社が祀られている(図1)。それぞれの神社の主祭神は、氷川神社が素盞鳴命、氷川女体神社が奇稲田姫命、中山神社が大己貴命であり、したがって3社は、それぞれ男体社、女体社、王子社の関係にある。

ところで筆者は旧稿²⁾において、これら氷川3社の間に次のような方位関係があることを指摘した。すなわち、3社はほとんど正確に一直線上に並び、氷川神社と氷川女体神社のほぼ中間に中山神社が位置することになるのであるが、この3社を結んだラインは、東西線を基準とし

て、南北に30°の傾きをもつ(図2)。この方位は、冬至の日の出、夏至の日没と関係する方位であり(図3)、冬至の日、太陽は、3社のラインを東南東へ延長した方向から昇り、夏至の日、西北西へ延長した方向に没する。

旧稿では、若やぐ靈力を意味する《ミヌマ》という言葉キーワードとして、特に冬至の日の出に注目し、氷川神社において毎年12月10日に行なわれる大湯祭が、本来、火祭的側面と禊ぎの側面を有することから、前者が火による太陽の復活、後者が水による太陽の復活(折口信夫³⁾は禊ぎの本質を蘇りに求めている)をそれぞれ意味しているとし、大湯祭の淵源が冬至の太陽復活祭に由来するのではないかと述べた。

そして全体の方位観念を、辰巳(東南)の方向に常世国があり、そこからは年神が来臨し、戌亥(西北)の方向に妣の国があり、そこからは祖神が来訪するという三谷栄一⁴⁾の《まれびと二元論》のモデルで説明できるとした。いわば、民俗学と地理学の間領域(民俗地理学)として、氷川3社の問題を考えたわけであるが、いつ、誰が、どのような目的で、3社の配列を行なったかという歴史地理学的な問題については、当時はわからなかった。しかしその後、この3社を結ぶラインを、3社を越えて西北西の方向、すなわち祖神の方位——過去の方位へと延長することによって、その手がかりをつかめたと思われるので、以下、述べていくことにしたい。

II. 日置について

氷川3社のラインを西北西の方向に延長すると、武蔵国比企郡の領域に達する。比企の地名の由来については、史料上では確認できないが、

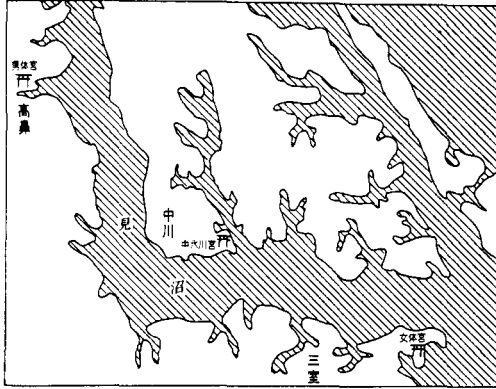


図1 見沼周辺の氷川3社
 (『新編埼玉県史 通史編1』p.725より)

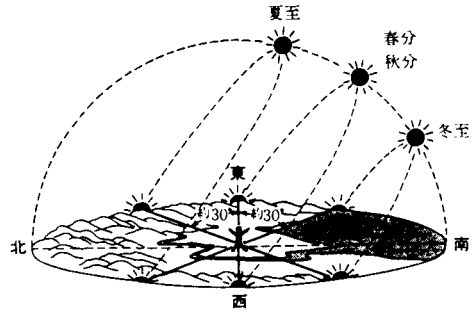


図3 太陽の出没方向の季節変化
 (水谷慶一『続 知られざる古代』p.56より)

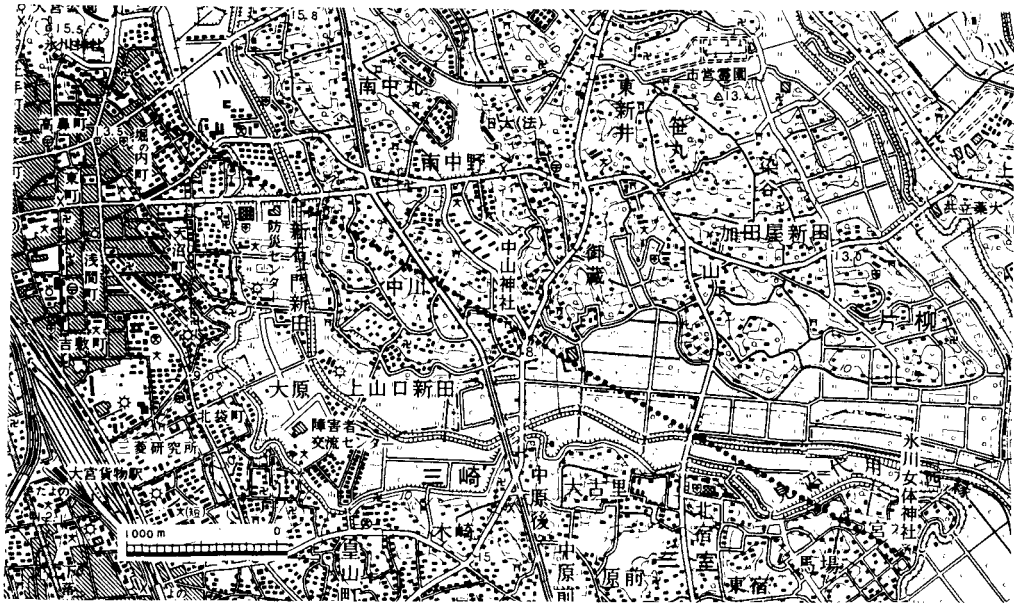


図2 氷川3社の方位関係
 (5万分の1地形図「大宮」を縮小)

ここに日置部が置かれ、それを管掌する日置氏が存在していたことに拠るとする説が一般的である⁵⁾。

日置の性格については諸説あるが、古代天皇の日神的權威を奉斎し、全国に鼓吹する職掌を有する、すなわち王権伸張のパロメーターとして把握される傾向にある。最近では、井上辰雄の「日置部の研究」⁶⁾が现阶段の水準を示していると思われるが、井上は、全国各地の日置部の

性格を比較検討した上で、次のような共通項を抽出した。

- ① 司雨的性格を有する鴨氏と類縁関係にあり、日置氏もまた司雨的性格が濃厚であり、水源の山の磐座を祀る。
- ② 『日本書紀』垂仁天皇39年10月条に見える「十箇の品部」と類縁関係にある。
- ③ その分布が、河川の中流域を占める場合は、諸流の分岐点に位置することが多く、

また、下流域にある場合は、その河口部をおさえることが少なくない。

- ④ 『新撰姓氏録』右京皇別下および『日本書紀』応神天皇2年3月条の記事によって、土形君や榛原君とともに、大山守命を始祖とする同族意識を有していたことが知られる。したがって、日置氏が、燃料を供給する榛原や、埴土を出す土地をにぎって、土器生産に関与した可能性がある。
- ⑤ 砂鉄を産する地域では、鉄生産に従事した可能性がある。
- ⑥ 宝剣に関わりをもつ。
- ⑦ 日神と結びつきを有する。太陽神が隠る岩戸や宮殿に奉仕して、冬至の祭である鎮魂祭に関わる大宮売神を祀る。
- ⑧ 日奉部と共通の信仰を有する。
- ⑨ 物部氏と関係を持ち、物部氏が勢力を失うと、蘇我氏に掌握されるようになる。
- ⑩ 大和政権の地方統治に大きな役割を果たす。その場合、支配形態には服属地に支配者の斎く神社を祀るという方式がとられる。
- ⑪ 常世国や天上界への通路——迎神の聖地に位置する。
- ⑫ 白鳥を神霊の化身ないしは神を運ぶものとする信仰を、鳥取部と共有する。
- ⑬ 忌部氏と関係がある。
- ⑭ 水や火による再生儀礼と関わる。
- ⑮ 太陽の運行と関連した折り目の日に、神霊（後に主として穀霊、日の御子または祖霊と観念される神）を迎えるために聖火をとす。

そこで、以上のような日置の性格について、見沼および比企付近の地で当てはまるものはないか検討していくことにする。

- ① 氷川女体神社の御船祭は、鎌田東二⁷⁾の解釈によれば、司雨と関係する。また、大宮市宮原町に加茂神社が存し、付近を鴨川が流れる。一方、比企郡唯一の式内社伊古乃速御玉比売神社には、神体山に雨乞いの祭りが伝わる⁸⁾。
- ② 比企郡に臨接する大里郡大里村に玉作の

地名があるが、付近の船木遺跡⁹⁾では、玉造の工房と考えられる住居跡が検出されている。

- ③ 比企郡の中心地は、都幾川、高麗川、越辺川などの中流域を占め、それらの合流点に当たる。一方、氷川3社の地は、見沼から河川を下って東京湾へ出ることは容易であったと考えられるから、河口部に当たると解釈することができる。
- ④ 宝亀11(780)年12月25日の「西大寺資財流記帳」¹⁰⁾に「武蔵国入間郡榛原庄」の名が見えるが、現在の坂戸市粟生田付近に比定される¹¹⁾ので、比企郡に南接する地域となる。また、土師氏は、天応元(781)年に菅原に改姓するが、『西角井系図¹²⁾』によれば、将門の乱による武蔵武芝退任後の氷川神社の神主家は、菅原姓を名乗る。
- ⑤ 氷川神社東遺跡¹³⁾で小鍛冶遺跡が、桶川市大山遺跡¹⁴⁾で製鉄遺跡が、それぞれ発見されている。一方、氷川女体神社の社宝に鉄鈴があり¹⁵⁾、付近の見沼には、谷川健一¹⁶⁾によって製鉄に関係あるとされる「片目の魚」の伝説がある¹⁷⁾。
- ⑥ 埼玉郡の稻荷山古墳から鉄剣が出土している。
- ⑦ 氷川神社の大湯祭は、冬至の太陽復活祭に、その淵源をもつと考えられる。また、地名が大宮である。
- ⑧ 武蔵七党に西党があるが、『武蔵七党系図¹⁸⁾』では、その祖を武蔵守日奉宗頼とし、子孫は在庁官人として活躍し、多摩川沿岸の地に勢力を張る。
- ⑨ 『聖徳太子伝暦』¹⁹⁾に、武蔵国造として物部連兄麻呂の名が見え、入間郡の式内社に物部天神社が存する。また、比企郡滑川町の寺谷廃寺²⁰⁾は、飛鳥寺様式の瓦を出土しており、蘇我氏との関わりを示唆する。
- ⑩ 後述するように、氷川3社がそれに当たると考えられる。
- ⑪ 見沼は、海上他界に通じる。
- ⑬ 氷川神社の大湯祭がこれに当たる。

⑮ 氷川神社の大湯祭がこれに当たる。

以上のように、井上が抽出した日置の性格はまた、見沼や比企の地にもよく当てはまるので、この地域に日置が存在した可能性はきわめて高いと考えられる。

ところで、全国的に、日置の分布する地域に、冬至や夏至の太陽の出没方位に関係する神社や遺跡の配列が見られることが指摘されている。それは、日置の⑦、⑩、⑪、⑭、⑮などの性格を考えれば当然であろう。

・事例1：出雲（日御碕神社一出雲大社一日登）

大和岩雄²¹⁾は、出雲大社から見て、西北西30°の方位（夏至の日没の方位）に、中世、日沈宮とも称された日御碕神社が祀られていることを指摘している。また筆者は、このラインを東南東に延長すると、木次町日登付近に到達することに気が付いた(図4)。すなわち、冬至の日の

出の方位に当たる（以下、このラインを出雲ラインと仮称する）。

天平11(739)年の「出雲国大税賑給歴名帳」²²⁾によれば、出雲郡から神門郡にかけて、日置部の濃密な分布が知られるが、『出雲国風土記』(以下、『風土記』と省略する)には、神門郡に日置郷が見える。日置郷は現在の出雲市上塩冶町付近に比定される²³⁾ので、出雲ラインにきわめて近接する。ところで、『風土記』は、日置郷の地名の由来について、「志紀嶋の宮に御宇しめしし天皇(欽明天皇)の御世、日置の伴部等、遣され来て、宿停まりて政為し所なり。故、日置といふ。」と述べる。この政の内容については一切説明がないが、あるいは出雲ライン設定に関わるものではなかったであろうか。

また、『風土記』には、神門郡塩冶郷があり、現在の出雲市今市・大津・塩冶町北部付近に比定される²⁴⁾ので、日置郷とは接しており、ほぼ出

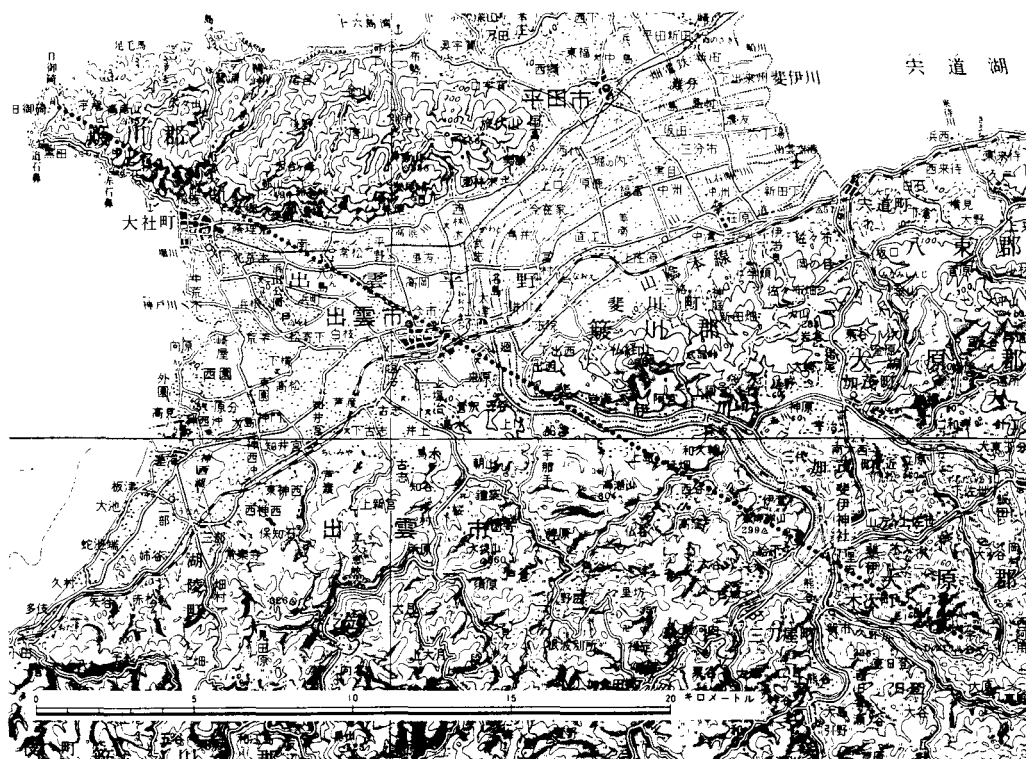


図4 日御碕神社・出雲大社と日登地区
(20万分の1地勢図「大社」「浜田」を縮小)

雲ライン上に乗ってくると考えられる。『日本書紀』崇神天皇60年7月条には「止屋の淵」が見えるが、ここは出雲臣の祖である出雲振根が、朝廷へ神宝を自分の許可なく差し出した弟、飯入根を謀殺した場所とされている。『古事記』では、倭建命が出雲建を殺した話とされているが、この出雲振根は、一般には、『風土記』出雲郡健部郷条に見える神門臣古禰に擬せられている²⁵⁾。

この物語の歴史的背景は、西出雲を支配していた神門臣一族と、東出雲を支配していた出雲臣との間に抗争があり、ついには、大和政権の強力な援助を得た東出雲の勢力が、西出雲の勢力を服属せしめたところにあるといわれている²⁶⁾。したがって、このような服属伝承がある地域と、日置部が進駐してきて政を行なった地域がきわめて近接していることから考えても、日置部の政は、出雲ライン設定に関わるものであった可能性が高いといえよう。

次に、日御碕神社については、『風土記』では美佐伎社、『延喜式』では御碕神社と記している。上宮は素盞鳴命を祀るが、下宮は日神を祀り、これを日沈宮と称していた。その祠官は、集古文書収録の建長5(1253)年3月の文書によれば「補任日置政治家／出雲国日御崎檢校職」とあり、さらに元弘3(1333)年4月の文書には「日三崎檢校職、神領使日置政友」などとあり、日置氏の任ずるところとなっていた²⁷⁾。なお、下宮のもとの社地と伝えられるのは、海岸にある経島であるが、これを日置島ともいい、やはり大和²⁸⁾が指摘するように、経島も出雲大社から見て夏至の日没の方位に当たる。

最後に、日登地区についてであるが、『風土記』にいう大原郡来次郷の地に当たる。天平6(734)年の「出雲国計会帳」²⁹⁾には「大原郡人日置部首」が見え、『風土記』にも、大原郡の主政として日置臣が見える。また、西日登に引野という集落があり、これは『風土記』の「引沼の村」に当たるとされる³⁰⁾ので、この付近に日置が存在していた可能性は高い。

以上のように、出雲ラインに沿って日置の分布が見られることから、このライン設定に日置

が関与した可能性はきわめて高く、また神門郡の服属伝承や、日置部が派遣されて政を為したという記録は、井上が日置部の性格として指摘する大和王権伸張のパロメーターという位置付けにもよく符合するのである。

なお、氷川神社との関係にも一言ふれておきたい。氷川神社の社名について、文政11(1822)年に成立した『新編武蔵風土記稿』は、当社が出雲国氷の川(斐伊川)の川上に鎮座する杵築大社(出雲大社)を勧請したことに由来するとしている。また、氷川神社の神主家であった西角井家では、宝暦以降多く出雲守を称し、千家家と同じ亀甲に剣花菱の紋所を用いていた³¹⁾。

ただし、上代特殊仮名遣いによれば、「氷」が甲類であるのに対し、「斐」は乙類に属し、また、出雲大社の地は、斐伊川の川上ではなく、寛永年間の流路変化以前まで川下にあったなどの問題があるが、加藤義成³²⁾は、氷川神社が勧請したのは杵築大社ではなく、大原郡木次町の式内社斐伊神社であるとする。

いずれにせよ、両社ともほぼ出雲ライン上に位置し、氷川3社のラインとの類似性が考えられる。そもそも武蔵国造は、『古事記』誓約段などによれば、出雲国造と同祖関係にあり、また、武蔵国の式内社には、入間郡に出雲伊波比神社が、男衾郡に出雲乃伊波比神社が存在することなどを考えると、氷川神社が出雲から勧請された可能性はあると言えよう。

氷川3社は、前章で述べたように、見沼に囲まれるように立地していたが、『ミヌマ』という言葉は、「出雲国造神賀詞」にも「若水沼間」として登場し、折口³³⁾は、杵築の地に彌努婆の社と彌努波の社(『風土記』出雲郡条)が存し、「みぬは」は「みぬま」に通じるとしている。彌努婆の社は、平田市奥宇賀の奥宇賀神社に合祀された和田神社に、彌努波の社は、同市口宇賀の宇賀神社に合祀された貴船神社に、それぞれ比定されている³⁴⁾。したがって、厳密に言えば杵築郷ではなく東接する宇賀郷の範囲になるが、このように武蔵と出雲のラインにそれぞれ近接して、『ミヌマ』の地名や神名があることは注目さ

れてよからう。

・事例2：肥後（疋野神社—トンカラリン—八方ヶ岳）

『和名抄』に見える肥後国玉名郡日置郷は、熊本県玉名市立願寺^{（平）}匹野原を遺称とし³⁵⁾、式内社疋野神社が祀られている。付近では、玉名郡家の正倉と考えられるような遺構も検出されており³⁶⁾、やや時代は下るものの、11世紀後半の「八幡宇佐宮御神領大鏡」³⁷⁾に「当（玉名）郡々司日置則利」とあるように、かつての日置氏の根拠地と考えられる。ここは菊池川の河口であるが、これをやや溯った玉名郡菊水町江田からは、寛政6（1794）年に、「玉名郡人／外少初位下日置卸公／権擬少領」と記した墓誌銅板が発見されている。さらに、菊池川を溯った中流域の山鹿市には日置の地名があり、上流域にも疋田（鹿本郡菊鹿町）という地名が存在する。

ところで、この墓誌発見地点付近に、「トンカラリン」と称するトンネル状の遺跡がある。その性格について、井上³⁸⁾は、一種の魂の再生装置として解釈した。同様の遺跡は、鹿本郡菊鹿町

（権現穴）や同郡鹿央町（岩倉山）にも存在するが、古閑三博³⁹⁾は、疋野神社やトンカラリンなどの遺跡、日置・疋田の地名、そして八方ヶ岳がほぼ一直線上に並び、その方位が東西線を基準にして約30°の傾きをもつ（図5）ので、夏至の日の出、冬至の日没に対応していることを指摘している。

・事例3：下野（下野国府—筑波山）

下野国には、従来、日置の存在は知られていなかったが、近年、下野国府跡で出土した漆紙文書⁴⁰⁾（第1号文書・売地券・延暦10年以前と推定／第3号文書・正税納入に関する文書の草案・延暦9年）によって、日置部が存在していたことが明らかになった。ところで、発掘された国庁跡と、筑波山を結んだラインが、東西線を基準として、南北に30°の傾きをもつ（図6）ので、冬至の日に、国庁から見て筑波山から日が昇ることになる。

平川南⁴¹⁾は、下野国府域内と推定される大溝SD111から出土した「都可郷」と記す返抄木簡を検討して、その廃棄場所が郡家になるはずであ

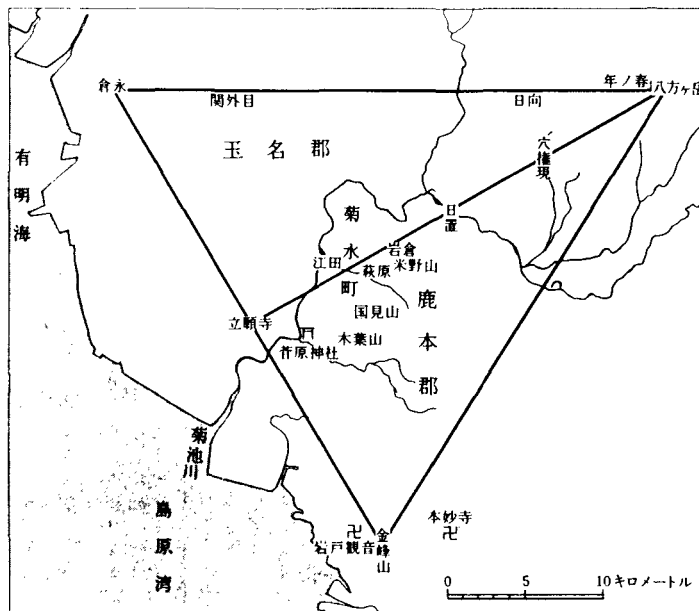


図5 トンカラリン遺跡周辺図
（水谷慶一『知られざる古代』p.73より）

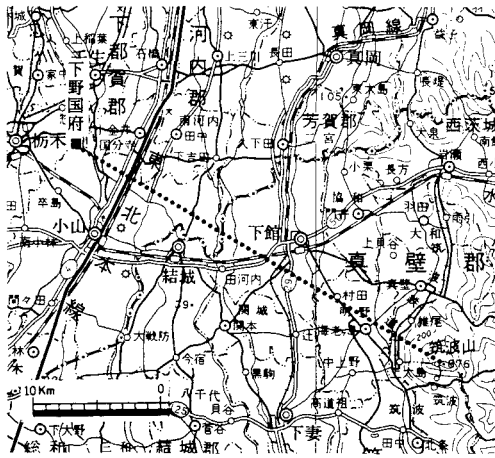


図6 下野国府と筑波山
(50万分の1地方図「関東甲信越」を縮小)

るから、都賀郡家は国府付近に存在したとされている。したがって、下野国府の所在地は、都賀郡都可郷であったとすることができよう。現在、都賀については、これを「ツガ」と読んでいるが、最近紹介された名古屋市博物館所蔵の『和名抄』⁴²⁾では、これに「トカ」と振っているので次章で詳述するように、朝鮮語で「日の出」を表わす「トキ」という言葉が転訛したものと解釈することができ、まさに、下野国府の地は、迎日の地であったとすることができよう。

現在、国府跡には宮廷神社が祀られているが、この神社は、寛喜2(1230)年の小山朝政の讓状⁴³⁾に挙げられる、守護領の中に「宮目社」とみえるものに他ならない。この神社が、ここに国府が置かれていた時期に存在していたかどうかは不明であるが、井上⁴⁴⁾が指摘するように、太陽神が隠る岩戸や宮殿に奉仕するのが大宮売神である。ちなみに、国府跡からほぼ夏至の日没の方位へ約2.7kmの地点に、大宮神社が所在している。また、国府跡から2km近く北になるものの、栃木市田村町に「日向ノ里」という小字地名があり、これも先の讓状に見える「国府郡内日向野郷」の遺跡とみなされている⁴⁵⁾。

以上のように、日置が存在したと考えられる地域に、冬至や夏至の日の出・日没と関わる神社や遺跡の配列が見られるのは、現在の所、水

川神社をも含めて4例であるが、今後、他の日置の場合を検討することによって、同様の事例が見出される可能性があるだろう。

III. 吉志について

前章では、氷川3社のラインを延長すると武蔵国比企郡に到達することから、この地に日置が存在した可能性について述べたが、比企地方はまた、原島礼二⁴⁶⁾・金井塚良一⁴⁷⁾によって、壬生吉志と呼ばれる渡来系氏族が入植した地域でもあると推測されている。そこで、氷川3社のラインの成立に関わった第2の可能性として、吉志を取り上げてみたい。

吉志(吉士)はもともと「コニキシ」「コキシ」(百済や高句麗の首長)と同語であって、新羅17等官位の第14位にも「吉士」の官号があるが、早くわが国に渡来した渡来系氏族であった。もとは難波吉士として一族をなしていたが、やがて各地に分住し、居住地や職名を冠して、三宅吉士・飛鳥部吉志・壬生吉志など、さまざまな吉志姓を名乗るようになっていく。吉志の中には、難波吉士のように、海外からの使節の送迎や接待など、主として外国との交渉に活躍した一族もあったが、『日本書紀』安閑天皇2(535)年9月条に「桜井田部連・犬大養連・難波吉士等に詔して、屯倉の税を主掌らしむ。」とあるように、屯倉の管掌にも重要な役割を果たしたのである。

ここでは吉志の后者の役割を重視することになるが、『日本書紀』安閑天皇元(534)年12月条に、武蔵国造の笠原直使主が朝廷に、横淳・橘花・多氷・倉櫟の地を屯倉として献上したという記事がある。一方、武蔵における吉志の資料としては、『続日本紀』神護景雲2(766)年6月条により橘樹郡人飛鳥部吉志五百国が、『類聚三代格』卷8や『続日本後紀』承和12(845)年3月条により男衾郡大領壬生吉志福正が、『日本靈異記』中巻第3により多麻の郡鴨の里の人吉志火麻呂が知られる。橘花屯倉は『和名抄』の橘樹郡三宅郷付近に、倉櫟屯倉は倉樹の誤りとして『和名抄』の久良郡付近にそれぞれ比定され

るが、五百国は久良郡で白雉をとらえているので、橘花・倉櫛屯倉の管掌者として飛鳥部吉志が派遣された可能性がある。また、多氷屯倉は多末の誤りとされるので、ここでも吉志火麻呂との対応関係がうかがえる。残る横渟屯倉であるが、これは『和名抄』の横見郡付近に比定されている。横見郡は、3郷から成る小規模な郡であるにもかかわらず、式内社が3社も存在し、また比企郡に食い込むような形で接するという特殊なあり方からも、横渟屯倉に起源をもつと考えてよいと思われる。

さて、原島・金井塚は、壬生吉志が本来、横渟屯倉の管掌者として派遣されたという立場をとるものである。壬生吉志福正は男衾郡榎津郷付近に居住したと考えられ、横見郡からは西方に20km程度離れるが、この点について金井塚は次のように説明する。

北武蔵には、古墳の石室側壁に胴張りをもち、いわゆる胴張り型と呼ばれる古墳(図7)が存在する。これらはその石室のタイプから、武蔵型と毛野型に分類される。そのうち武蔵型の古墳は、東松山地方(図8-A)と荒川中流域の右岸段丘上(図8-B)に最も密に分布するが、前者は6世紀末もしくは7世紀初頭に出現し、後者は7世紀後半から8世紀初頭に出現するという具合に、A群とB群とでは時期差が見られる。さらに金井塚は、2つの古墳群の石室構造を比較すると、B群の石室構造は、A群の終末期の

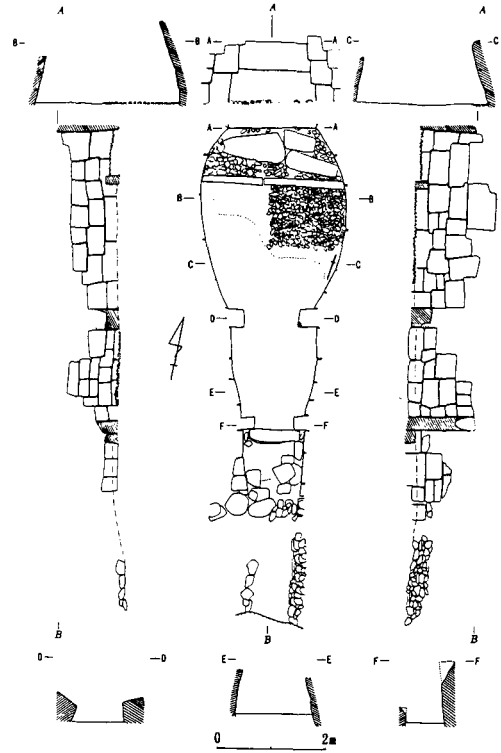


図7 胴張りのある横穴式石室
(東松山市附川7号墳)
(金井塚良一『吉見の百穴』p.227)

石室構造を忠実に踏襲していたと見られるとして、A群からB群への伝播を推定した。

ところで、A群の地域はまさに横渟屯倉付近であり、B群の地域は、前記9世紀の文献によって、壬生吉志福正が居住していたとされる榎津



図8 胴張りを有する横穴式石室の分布
(金井塚良一『古代東国史の研究』p.239より)

郷に比定される地域であった。横渟屯倉の設置時期について、『日本書紀』には安閑天皇元(534)年と記されているが、原島⁴⁸⁾は『日本書紀』に見える屯倉設置時期を詳細に検討して、屯倉の設置年次が、欽明・推古朝の屯倉設置を中心に意図的な整合性をともなって配列されており、また池溝開発記事が屯倉設置記事と同様な整合性を示し、屯倉設置記事全体と密接な連関の上に配置された可能性が高いとした。そして、屯倉設置記事と池溝開発記事は、『日本書紀』の完成時に編者達によって編纂上の一定の操作が加えられた可能性が大きいという疑義を提起した。原島⁴⁹⁾自身は、屯倉設置の記事の検討を基盤にして、横渟屯倉の設置は、『日本書紀』推古天皇15(606)年の「亦国毎に屯倉を置く。」という記事と関連する6～7世紀の交前後と考えている。

この年代は、東松山地方に、胴張り型石室を有する古墳が出現した時期とほぼ対応することになり、しかもその出現の仕方が唐突であることから、胴張り型石室は、7世紀の初め頃、この地に入植した壬生吉志によってもたらされたものであり、その後、壬生吉志が男衾郡方面へ移動したことが、A群からB群への胴張り型石室の伝播に反映されているというのが金井塚の所見である。

なお、この地方に特有の横穴墓についても、金井塚は、それらが胴張り型石室とほぼ同時期に出現し、7世紀から8世紀に、吉見丘陵(横見群)に膨大な横穴墓群(吉見百穴横穴墓群・黒岩横穴墓群・岩粉山横穴墓群)を形成したが、一部は比企地方の山陵沿いに西漸して、大谷(比丘尼山横穴墓群)・福田(天神山横穴墓群・高根山横穴墓群)・古里(尾根横穴墓群)などに新たな横穴墓群を形成することを指摘した。そして、福田・古里は、当時は男衾郡に所属していたとみなして、横穴墓もまた胴張り型石室と同様に、横見郡から比企郡を経て男衾郡に分布圏を拡大し、壬生吉志の動向と一致する分布傾向を示していたとした。

以上のように、原島・金井塚は、6～7世紀の交前後に横渟屯倉が設置され、その管掌者と

して壬生吉志が比企・横見地方に入植し、その後、勢力を伸張して、7世紀後半には男衾郡の中枢に到達して力を蓄えたのが、『続日本後紀』の9世紀半ばの記事に見える前男衾郡大領壬生吉志福正であり、そのことは胴張り型石室を有する古墳の出現と伝播によって裏付けられるとした。

さらに原島⁵⁰⁾は、この説を補強するものとして、難波から壬生吉志がこの地域に入植したことを反映しているとして、難波と比企・横見・男衾地方に、以下のように共通する地名があることを指摘した。

- ①〔摂津国都下国造と武蔵国比企郡都家郷〕
〔摂津国西成郡坐摩神社と武蔵国比企郡渭後郷〕

都下国造は、『延喜式』巻3神祇3の臨時祭の条に、「凡そ座摩巫は、都下国造氏の童女七歳已上の者を取りて之に充つ。」と見えるものである。一方、坐摩神社は大阪市東区渡辺町に鎮座するが、旧社地は中央区石町であったと伝える。坐摩神社の祠官はかつて都下姓を名乗っており、吉田晶⁵¹⁾が述べるように、おそらく都下国造が坐摩神社を奉斎していたと推測される。

ところで、『和名抄』によれば、武蔵国比企郡に都家郷があり、東松山市高坂付近に比定されている。また、同郡には渭後郷があり、『和名抄』では「沼乃之利」と訓じているが、原島は、他の用法を参照すると、本来「イカシリ」と読まれた可能性があるとして、これを滑川町伊古に比定する。同地には、式内社伊古乃速御玉比売神社が存在するが、安産に御利益があるとされており⁵²⁾、坐摩神社の旧社地に存する「神功皇后の鎮座石」について、大和⁵³⁾が子産み石の一つとして解釈していることを思い合わせると興味深い。

以上のように、摂津国西成郡と武蔵国比企郡に共通する地名や神社名がセットで存在することになるが、天平宝字4(760)年11月18日の日付のある「摂津国安宿王家地倉売買券」⁵⁴⁾には、「西成郡擬大領従八位上吉志船人」と「擬少領初位下三宅忌寸広種」の名が見える。前者の吉志(士)

は、もと難波吉士と称したが、同氏が吉士集団の代表的氏族であったために、吉士とのみ称するようになったものである。後者の三宅忌寸は、『新撰姓氏録』摂津国諸蕃、三宅連の中の一部であると考えられる。三宅連は、『日本書紀』によれば天武天皇12(683)年に連となっているが、それまでは三宅吉士と称していた。以上のように、摂津国西成郡は、吉士集団の本拠の一つであるとみなされる。

②〔摂津国住吉郡榎津郷と武蔵国男衾郡榎津郷〕

住吉郡榎津郷は、『万葉集』巻3にも「墨吉乃得名津」と見え、大阪市住吉区付近に比定されている。住吉郡に吉士の所在を示す直接的な資料は存在しないが、吉田東伍⁵⁵⁾は、住吉岸付近に難波吉士の本拠を考えている。

一方、男衾郡榎津郷は、埼玉県江南町・川本町付近に比定され、先述したように壬生吉志福正の根拠地に当たる。近年、江南町柴で寺内廃寺が発掘され、その規模の壮かさや、9世紀に入って急速に整備される点から見て、壬生吉志福正に関わる寺であると推測されている⁵⁶⁾。

③〔摂津国嶋上郡高於郷と武蔵国横見郡高生郷〕

嶋上郡高於郷は、天平宝字年間(749~757)と見られる「西南角領解」⁵⁷⁾に「摂津職嶋上郡高於郷」と見えるもので、原島は、『和名抄』の嶋上郡高上郷はこの高於郷の誤りであるという立場に立つ。高於郷は高槻市西部付近に比定される⁵⁸⁾が、この地名は、『日本書紀』安閑天皇元年閏12月条に見える三嶋竹村屯倉につながると考えられ、三宅吉士か三宅連が関わりをもっていた。西方には吹田市岸部の地名があり、平安時代の文書に見える吉志庄⁵⁹⁾・吉志部村⁶⁰⁾に当たる。

一方、横見郡高生郷は吉見町田甲に比定されるが、同地には、宝龜3(772)年の太政官符⁶¹⁾に見える式内社高負比古神社も存在する。なお原島は、タカオ(フ)・タケオ(フ)地名が、他の地域でも屯倉の所在地と一致する場合があることや、高生郷が横見郡の中心的な郷であることから、横渟屯倉をこの地に想定している。

以上のような、原島・金井塚による壬生吉志入植説に対しては、池上悟⁶²⁾や森田悌⁶³⁾の批判もあるが、一応ここでは仮説とみなして、水川3社の太陽方位信仰との関わりについて考えていきたい。

水谷慶一⁶⁴⁾は、坐摩神社の旧社地が、そこから見て、冬至の日に、大和の高安山から太陽が昇る位置に当ることを指摘している。一方、高安山に夏至の日の出を見る地点には、『古事記』仁徳天皇の段に見える巨木伝説にゆかりの式内社等乃伎神社が位置する(図9)。すなわち、「免寸河の西の方に、一高樹あり。その樹の影、巨日に当れば、淡道島に速び、夕日に当れば、高安山を越えき。」というものである。樹の影は太陽と反対側にできるはずであるから、この場合の夕日とは、『古事記』には直接書かれていないが、冬至の日没の際の夕日ということになる。坐摩神社は摂津国西成郡に位置するので、先述したように吉志との関わりが考えられるが、等乃伎神社についても、すぐ東が堺市草部で、『和名抄』の和泉国大鳥郡日部郷の故地に当たり、『日本書紀』雄略天皇14年4月条の記事から、草香部吉士に関係する地名と見られている⁶⁵⁾。以上のように坐摩神社・等乃伎神社・高安山のライン設定に吉士が関わった可能性は、きわめて大きいといえよう。

ところで、坐摩神社の旧社地に近い大阪市北区免我野町については、これを『日本書紀』仁徳天皇38年7月条に見える「菟餓野」の遺称地であるとする説⁶⁶⁾があるが、この「トガ」という地名は、「トキ」が転訛したものとされる。水谷⁶⁷⁾は、「トキ」が古代朝鮮語で「日の出」を表わし、これを漢音の音借で「都祈」と書き、呉音で読むと「都祈」となることを指摘している。したがって、トキとツゲは変換可能な言葉であり、その意味は「日の出」となるので、都下国造が奉斎する坐摩神社の旧社地トガノとは、まさに迎日の地、冬至の日の出の地ということになる。また、等乃伎神社も、日の出に関係ある神社ということになる。

さて、武蔵国比企郡にも都家郷が存在するこ

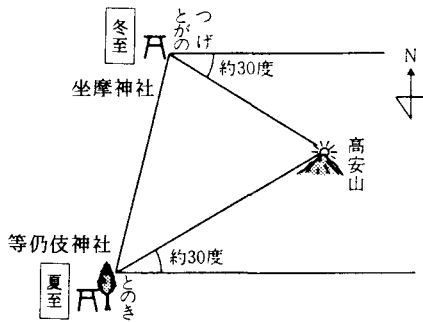


図9 坐摩神社・等仍伎神社と高安山
(水谷慶一『続 知られざる古代』p.272に加筆)

とはすでに述べたが、ここにはまた都幾川や都幾山もあって、やはり迎日の地であったことが推測される。都家郷を、原島⁶⁸⁾は東松山市高坂とその周辺地域に比定しているが、ここが冬至の迎日祭祀の地であるとすれば、都家郷から見て、冬至の日に太陽が昇る地点には何があるのだろうか。金井塚⁶⁹⁾は、「丘陵地帯に立って東方を俯瞰すれば、高坂台地の裾はやがて広大な荒川の沖積原に推移して、そのさきは、遙か大宮台地の彼方まで遠望できる。」と述べている。すなわち、都家郷から見て冬至の日に、太陽は氷川3社の存する「見沼」の地から昇るのである。

もっとも、これは都家郷のどこに定点を置くかによって変わってくるのであって、上記の金井塚の文章は、東松山市と鳩山町の境界線上に位置する物見山(図10-A)からの眺めと思われるが、仮にこの地から正確に冬至の日の出の方位に線を引くと、先述した氷川3社のライン(B-C)より、南に約5km程度ずれることになる。反対に氷川3社のラインを夏至の日没の方位へと延長すると、東松山市下野本の将軍塚古墳(D)付近へ達する。そこで、定点Aを、原島や金井塚が都家郷の中心であるとする東松山市高坂付近(E)へ移動すれば、B-C-Dラインとの誤差は、南北2km程度まで縮められる。ただし、高坂台地の北を流れる都幾川以北は都家郷の範囲になると推測されており、B-C-Dラインが正確には都家郷の範囲に入らないと思われる点は問題を残す。

なお、物見山から冬至の日の出の方向に伸ば

したラインに近接して、足立郡の式内社調神社(F)が位置する。調神社の所在地は浦和市岸町であり、原島⁷⁰⁾は、資料上には見出せないものの、この地に調吉士が存在した可能性を指摘している。

ところで、『古事記』応神天皇段に、新羅の王子天之日矛の渡来について、次のような説話がある。

「新羅の阿具沼のほとりて、昼寝をしていた女が日光に感精して赤玉を産む。その赤玉をもらい受けて歩いていた農夫が、天之日矛に言いがかりを付けられ、赤玉を差し出す。赤玉は女に生れ変わり、天之日矛の妻となる。いつしか心のおごった天之日矛が妻をののしると、妻は先祖の国へ行くと言って、海を渡り難波に留まる。天之日矛は、妻の後を追いかけて、日本に渡来する。」

『古事記』は、難波に留まった天之日矛の妻について、「これは難波の比売碁曾の社にます阿加流比売という神なり。」と注しているが、この比売碁曾の社は大阪市東成区の式内社比売許曾神社に比定され⁷¹⁾、同市平野区には式内社赤留比売命神社も存在する。前者は古代の東生郡に位置するが、同郡の擬大領、擬少領は、8世紀の段階でそれぞれ難波忌寸、日下部忌寸であり⁷²⁾、両氏はもと、それぞれ難波吉士、草香部吉士の氏姓を称していたから、東生郡は、西接する西成郡と並んで、吉士集団の本拠地であったといえる。一方、住吉郡についても、吉士集団との関わりが推測されることについては、先に述べた。したがって、吉士集団の渡来が、天之日矛や阿加流比売の渡來說話に反映されているのではないかと考えられるが、『新撰姓氏録』撰津国諸蕃には、もと三宅吉士であった三宅連について、「新羅国王子天日杵命之後也。」と記している。

原島⁷³⁾は、武蔵国多磨郡の式内社阿伎留神社は阿加流比売と関係するのではないかと述べ、また『日本靈異記』によって、同郡に吉志火麻呂が存在することを指摘しており興味深い。

さて、先の天之日矛伝承の中で、水辺の女が日光に感精して赤玉を産む場所が阿具沼であっ

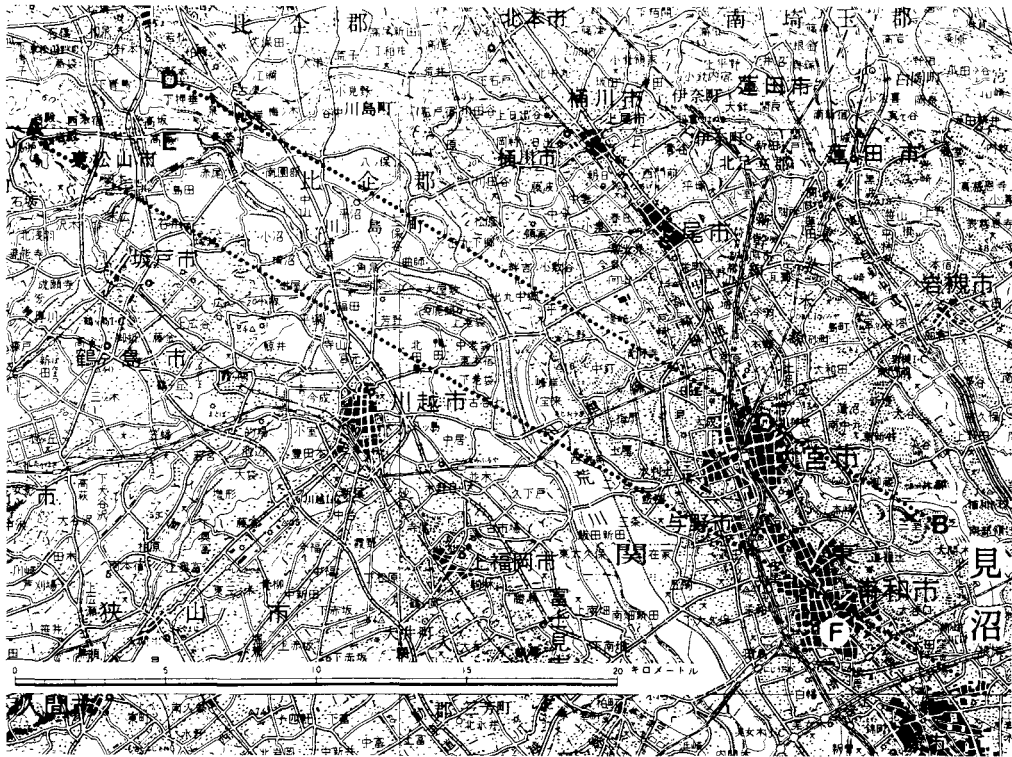


図10 比企・横見地方と足立地方
(20万分の1地勢図「宇都宮」「東京」を縮小)

たが、三品彰英⁷⁴⁾は、「アグは朝鮮語のアギすなわち小児を意味する語からきた名であり、新羅始祖赫居世王は別名を閼智居西干ともよばれ、閼智は阿只・阿志・阿之などと借音表記され、貴人の幼児をよぶ敬語的愛称や、中宮殿世子宮の乳母の封号としても使用されている。したがって、問題のアグ沼を「御子沼」と直訳することができ、また「乳母沼」と訳すこともできるので、民俗学的にわが国の「みぬま」「みぬめ」の観念と比較し得ると述べている。

したがって、氷川3社の見沼とはアグ沼のことであり、冬至の日の朝、太陽の光が氷川女体神社に差すということは、先の説話の具体的な表現であるということができよう。赤玉は太陽の象徴であり、なぜ女体神社であるかということも解釈できる。そして、これに関わったのが壬生部を管掌したと思われる壬生吉志であったということも、三品の見沼——アグ沼を、乳母

沼と直訳できるという指摘（壬生部はまた乳部とも書かれる）と対応するのである。

IV. 日置と吉志

以上のように、筆者は、比企郡——氷川3社のライン設定の主体について、日置と壬生吉志の2つの可能性を取り上げた。しかし、日置と吉志の性格が、ともに太陽信仰に関わり、大和王権の尖兵の役割を担っていたらしいということを考えると、両者の間に何らかの関係があったと予想することができよう。そこで、日置と吉志の分布を概観すると、日置がほぼ全国的に分布するのに対し、吉志の分布は、かなり限定されるようである。しかし、その少ない吉志の分布する地域に近接して、日置が存在する場所が多いようなので、以下それを取り上げてみたい。

① 紀伊国

日鷹吉士は難波日鷹吉士ともいわれ、三浦圭一⁷⁵⁾は、紀伊国日高郡との関係を示唆している。難波日鷹吉士の本質は難波であるが、吉士は水軍とのつながりが深く、水軍と関わる紀氏の居地に移住することは充分考えられる⁷⁶⁾。『続日本紀』天平神護元(765)年10月25日条には、海部郡に称徳天皇の岸村の行宮が見え、また『日本霊異記』下巻第28には、名草郡の貴志里や貴志寺が登場する。さらに、時代は下るが、『大御記』⁷⁷⁾永保元(1081)年9月26日条に吉志庄が見え、現在の那珂郡貴志川町付近に比定されている⁷⁸⁾。この那珂郡の大領が、『続日本紀』神護景雲元(767)年6月22日条に登場する日置毘登弟弓であった。また、天平17(745)年の「優婆塞貢進文」⁷⁹⁾に、紀伊国名(加)郡荒川郷の戸主日置造白麻呂の戸口、日置造石造が優婆塞として見えるが、この荒川郷は、那珂郡桃山町の安楽川を遺称とするので、まさに貴志川町に北接する地域である。

② 伊勢国

伊勢国多気郡に式内社紀師神社が存し、『和名抄』では、同郡に三宅郷がある。また、河曲郡には、式内社貴志神社と大鹿三宅神社が存在する。これらはいずれもミヤケとセットになっているので、吉志にちなむ社名である可能性が高い。

このうち、多気郡に日置氏がいたことは、天曆7(953)年12月の『伊勢国近長谷寺資財帳』⁸⁰⁾に、多気郡相可郷の土地を、日置島布町、日置佰雄、日置貴曾町子などが近長谷寺に施入していることから知られる。この日置氏の本拠は、同文書に「十六条三疋田里」「四疋田里」とあるもので、多気町三疋田、四疋田をその遺称地とする⁸¹⁾が、ちなみに、現三疋田の集落と紀師神社は、わずか2 km程度しか離れていない。他に伊勢国には、『和名抄』の壹志郡に日置郷があり、『日本三代実録』貞観10(868)年10月28日条に伊勢国百姓「日置福益」の名が見える。また『太神宮諸雑事記』2⁸²⁾にも「長上宮主日置惟時」とあるように、日置氏の濃密な分布が知られる。

③ 河内・和泉国

前章で述べたように、和泉国等仍伎神社の地に近接する堺市草部について、原島⁸³⁾は、草香部吉士に由来する地名と考えているが、等仍伎神社から高安山を結んだラインを約7 kmほど行くと、堺市日置荘の地に到達する。ここは河内国の範囲に入り、河内国には、現在のところ古代の日置氏(部)に関わる資料は知られていないが、日置荘地区には、榛原の転訛とみなされる⁸⁴⁾萩原天神社も存在し、西方1 kmの所には土師町の地名もある。したがって日置荘は、日置氏(部)に因む地名とみなして、まず間違いないであろう。なお、日置荘から東方約1 kmの美原町黒山は、林屋辰三郎⁸⁵⁾によって、『続日本紀』天平神護元(765)年10月2日条に見える黒山企師部の居住地と考えられている。さらに、黒山の東方3 kmの羽曳野市羽曳が丘、東南方5 kmの富田林市喜志は、それぞれ日置、吉志に因む地名である可能性がある。

次に、原島⁸⁶⁾は、草香部吉士と関わる屯倉として、『日本書紀』安閑天皇元(534)年10月条に見える茅渟山屯倉を考えているが、この屯倉は、草部の南約7 kmの岸和田市三田付近に比定されている⁸⁷⁾。一方、井上⁸⁸⁾は、『新撰姓氏録』未定雑姓に見える和泉国の日置部は、和泉国の海岸地域に居住していたのではないかとし、また、『続日本紀』宝亀8(777)年4月3日条の正八位下日置造飯麻呂等2人が、吉井宿禰を賜ったとする記事について、この吉井は岸和田市吉井町ではないかとする。等仍伎神社と高安山を結んだラインを西南西へ延長すると、ほぼこの吉井町付近に到達する。吉井町の西南約3 kmが岸和田の中心部となるが、岸和田の岸も吉志に由来する可能性がある。また、三田と吉井町は4 km程度しか離れていない。

④ 摂津国

摂津国は吉士集団の分布が最も密に認められる地域であるが、『新撰姓氏録』摂津国諸蕃によれば、日置造の存在が知られる。日置造の本拠地は不明であるが、井上⁸⁹⁾は、『延喜式』巻49、兵庫寮に見える摂津国有馬郡の羽束工戸を、『和名抄』の有馬郡羽束郷を本拠とするものと見る。

羽束郷は、三田市の羽束川流域の酒井、十倉付近に比定される⁹⁰⁾が、近隣には忍壁郷があり、三田市内に加茂の地名が存在する。泊櫃部、神刑部は、日置部とともに「垂仁紀」の十箇の品部として見えるものであり、鴨氏と日置氏は関係が深いので、井上は、三田付近に日置造の所在を考えているようである。この三田盆地に貴志の地名が存在し、ここは中世には貴志庄と呼ばれる荘園であった⁹¹⁾。

⑤ 讃岐国

『続日本紀』天平神護元(765)年8月25日条に、讃岐国日置毗登乙虫の名が見える。一方、『類聚国史』87、延暦21(802)年条に、讃岐国鶴足郡の人で伊豆に流罪となった吉師都麻呂の名が見える。

⑥ 筑前国

大宝2(702)年の「筑前国嶋郡川辺里戸籍」⁹²⁾により、宅蘇吉志の存在が知られるが、福岡市元岡付近に比定される⁹³⁾川辺里の西方約8kmに、志摩町岐志の集落があり、おそらく宅蘇吉志にちなむ地名と考えられる。この岐志の集落が面するのが引津湾で、ここは、遣唐・遣新羅使節の一行が博多の津から朝鮮半島へ向う際の経由地であり、引津亭の名は『万葉集』にも見られる。

これらに武蔵の例を加えると、日置と吉志が何らかの関係をもっていたことが推察されるのである。

ところで、氷川神社を奉斎していたことがほぼ確実なのは、神護景雲元(767)年に武蔵宿禰の姓を賜わり、律令国造となった足立郡丈部直不破麻呂等の一族である。森田⁹⁴⁾は、横見郡のものとして推定される正倉院蔵拵布屏風袋に用いられた天平勝宝5(753)年頃の庸布墨書⁹⁵⁾に「郡司少領外正八位下勲十二等杖部直[]」とあるのに注目して、横見郡は横渥屯倉の地で、古墳の分布も濃密で早くから開けた土地であるから、横見郡杖部直を古くからの政治勢力と見てもよく、あるいは足立郡丈部直を横見地方から進出してきた勢力と解し得るかもしれないとしている。

このように考えると、丈部氏は、まさに比企・横見地方から太陽の道を通って、足立郡にやってきたことになる。原島⁹⁶⁾は、『日本霊異記』によって、吉志火麻呂の存在が知られる多磨郡には、同じく『霊異記』下巻第7によって、多磨郡少領の丈直山継が存在することから、武蔵では、阿倍氏を介して吉志と丈部に何らかの関わりがあったのではないかと推測している。

稲荷山古墳出土の辛亥銘鉄剣に見られる獲加多支鹵大王の時、天下を左治した杖刀人の首、乎獲居臣については、これを東国の豪族とする説⁹⁷⁾もあるが、原島⁹⁸⁾は、乎獲居臣の上祖である意富比埜を大彦命とし、大彦命を始祖とするのは阿倍氏とその同族集団しかないこと。また、臣が称号であるとすれば、阿倍にはあるが武蔵の豪族にはないことなどから、乎獲居臣を、畿内の豪族である阿倍氏の系統に相当する一族の人物であるとした。そして、そのもとに配下として従ったのが、日置や吉志、丈部ではなかったかと想定している⁹⁹⁾。

そこで、阿倍氏と日置・吉志・丈部の関係について、それぞれ見て行くことにする。まず、阿倍と日置についてであるが、この点で想起されるのは、阿倍の複姓に阿倍引田臣が存在することで、原島¹⁰⁰⁾は、引田は日置田に由来するのではないかと述べている。岸俊男¹⁰¹⁾は引田臣の根拠地を、『古事記』雄略段の引田部赤猪子の物語などから、大和国城上郡の三輪山の南麓付近に比定した。そして、ここは雄略天皇の泊瀬朝倉宮に近いので、鉄剣銘の中で乎獲居臣が「獲加多支鹵の大王の時、斯鬼の宮に在る時、吾、天下を左治す」と述べていることと一致することになり、乎獲居臣が阿倍引田臣の系譜に連なるものであった可能性は十分に考えられるとしている。

次に阿倍と吉志の関係については、『新撰姓氏録』によれば、両者ともに大彦命を上祖としている。吉志は渡来系氏族なので、これが擬制的な関係であることは明らかであるが、志田諱一¹⁰²⁾は、難波吉士等が奏した吉志舞を、やがてこれを統率した阿倍氏が自ら演じるようになったこ

とで、吉志が阿倍氏の同族系譜に組み込まれていったのではないかと述べている。

最後に、阿倍と丈部の関係についてであるが、『新撰姓氏録』右京皇別上に見える杖部造は大彦命の後とするので、阿倍氏と同祖ということになる。丈部はおもに東国に分布し、阿倍氏を介して中央の部民制支配の土台を形成したと考えられている。例えば『続日本紀』神護景雲3(769)年3月13日条の陸奥国の土豪に対する賜姓記事の中で、丈部がその居住地により、阿倍陸奥臣・阿倍安積臣・阿倍信夫臣・安倍柴田臣・阿倍会津臣のように改姓されており、阿倍氏と丈部の密接な関係を示している。もっとも、従来、丈部は阿倍氏の同族とのみ見られてきたが、最近の佐伯有清¹⁰³⁾の研究によれば、阿倍氏の他に大春日氏、鴨氏、紀氏にも同族として丈部氏が存在したことが明らかになったので、丈部の伴造がすべて阿倍氏の同族とは限らない点は、注意を要する。

さて、以上の諸点を踏まえて、先に示した太陽信仰の問題をも含めて、この地のストーリーを描くと、大和王権の尖兵として、阿倍氏の主導のもと、日置や壬生吉志が比企・横見地方に入植し、ここから冬至の日の出の方位に当たる見沼の地に氷川3社を祀り、神官として丈部氏を派遣したということになるであろう。その際、氷川3社そのものも、厳密な方位で配列されたと考えられる。

問題は日置や壬生吉志の派遣時期であるが、上田正昭¹⁰⁴⁾は、『出雲国風土記』の所伝や日置部の分布状況などから、「王権の危機を克服してゆく時期にあたっていた欽明朝ごろに、あらためて中央より日置の管掌者たちが、たとえば出雲へ、あるいは、畿内の東方へと派遣されていったのではないか。」としている。松前健¹⁰⁵⁾や井上¹⁰⁶⁾も、同様に欽明朝頃と見ており、この見解に従えば、日置の派遣は6世紀半ば頃ということになる。一方、壬生吉志の武蔵への入植は、原島・金井塚説によれば6世紀末から7世紀初め頃となるので、比企・横見地方へ派遣されたのは日置が先であり、その後、壬生吉志が入植したこ

とになる。全国的に見ても、日置と吉志の分布状況に違いがあるのは、派遣された時期差によると考えられ、あるいは日置が派遣された地域のいくつかに吉志が送り込まれたのかもしれない。

ところで、胴張り型石室の分布が比企・横見郡から西北の男衾郡方面へ広がることについては既に述べたが、東南の足立郡方面にも、7世紀頃から胴張り型石室が若干出現するようである¹⁰⁷⁾。そのうち、大宮市三橋の側ヶ谷戸古墳群内の台耕地稲荷塚古墳は、氷川神社に比較的近いという地理的位置から、丈部氏との関わりが想定されている¹⁰⁸⁾が、やや胴張り型の石室を持ち、年代は7世紀前半に比定されている¹⁰⁹⁾。したがって、吉志と密接な関係をもつ丈部氏が胴張り型石室を採用したとも考えられ、7世紀前半か、それよりやや以前に、丈部氏が比企・横見地方から足立地方へ派遣された可能性があらう。

なお、神社が太陽の方位に関連して配置される意味であるが、井上¹¹⁰⁾は、日置が派遣された地域とは、本来、土着の太陽信仰が盛んな地域であったのではないかとしている。この見解に従えば、比企・横見地方や足立地方は、もともと土着民による太陽信仰が盛んであった地域ということになる。たとえば、見沼の彼方から日が登る氷川女体神社の地などは、それにふさわしい立地環境であったといえよう。そして、ここからおおよそ夏至の日没の方位に当たる比企・横見地方に、日置や壬生吉志が入植したことは、三谷¹¹¹⁾のいう祖神来訪の方位へ入ったことになり、土着民を掌握するには都合が良かったであろう。

たとえば、記紀に見える神武東征の物語においても難波から大和へ入ろうとして那賀須泥毗古にさえざられた神武天皇は、「吾は日の神の御子として、日に向ひて戦ふこと良はず。かれ賤奴が痛手を負ひつ。今より行き廻りて、日を背に負ひて撃たむ。」(『古事記』)と述べ、わざわざ熊野へ迂回して大和に入るようになる。このように、神武天皇の一行は、太陽を背景にするこ

とによって大和へ入ることに成功したが、この物語は、王権が進出する際に太陽の方位が重要視されたことを暗示しているように思えるのである。

そして、比企・横見地方へ入植した日置や壬生吉志は、丈部を足立郡に送り込んで、冬至の日の出や夏至の日没に対応する、より厳密な方位で氷川3社の配列を行なったと考えられるが、この場合は実際に太陽の影を計るようなことが行なわれたのではないだろうか。

6世紀頃の中国で書かれた『荆楚歳時記』¹¹²⁾には、魏晋の頃の宮中では、冬至の日の影を紅線で記し、冬至の後も、日の影が短くなるにしたがって毎日、線を記していたとある。日本古代の文献資料にそのようなことを明示するものは見当たらないが、前章で述べた等仍伎神社の巨木伝承に見られるような各地の巨木伝承¹¹³⁾は、日本でも太陽の影を計ることがあったことを想像させる。

ところで、日置の性格について柳田国男¹¹⁴⁾は、「日置のオキは多分韓招^{からまぎ}などのヲキで、これも日祀のことかと思う。」としている。それに対し折口¹¹⁵⁾は、日置の「おく」は「あらかじめ規定する」という意味であり、「日のことをあらかじめ数え定める職業団体が日置部なのである。」としている。いわば、「日」の部分については、柳田がsunの意味を、折口がdayの意味を認め、「置」の部分については、柳田が「祀る」意味を、折口が「数える」意味を重視したわけであるが、これについて水谷¹¹⁶⁾は、実は2人の説はコインの裏表であって、「日置」の意味は両説を兼ね合わせていたと見る。すなわち水谷によれば、日(sun)の方位の影によって、日(day)を勘定し、それ全体が祀りであったとなるのである。ここに、太陽と関わる暦の問題が出てくるのであり、暦・時を管理するということは、王権の問題に直結する。

時代は下がるが、氷川神社から頒布されていた「武州大宮暦」があり、『新編武蔵風土記稿』巻之153「氷川神社」の項には、

「昔は当社より頒暦ありて、その頃推歩のこ

とを司りしものは北原村の名主喜兵衛が先祖斎藤氏なりといへど、其顛末を詳にせず、世に伝ふ一年豆州三嶋暦と武州大宮暦と閏月の違ひありて、北条氏政より安藤豊前守に命じて糺命せられしが、三嶋暦の方正きに極り、それより武蔵の暦を停止せらると、これに拠れば天正の頃までは、猶暦を出したること知らる、」

とある。このような地方暦について、東原那美¹¹⁷⁾は、「その土地を代表する社寺から出されたものもあるが、ほとんどがそうでないところに特色がある」と指摘しており興味深い。泉州信田郷(現大阪府和泉市舞町)から賦暦として発行されていた「泉州暦」は、別名「岸和田暦」「信田暦」とも呼ばれ、舞村の聖神社(日知りに通じるか?)の神官である藤村家が主としてこれに当たっていたが、同家は、信太妻伝説の中心人物安倍安名と白狐との間に生まれた、陰陽師安倍晴明の子孫であると伝える¹¹⁸⁾。聖神社の地は、等仍伎神社から南南西に2km程度しか離れておらず、日置の存在が想定される岸和田市吉井町や、草香部吉士との関わりが考えられる岸和田市三田に近い点も注目される。

V. おわりに

以上で、古代の比企・横見・足立地方に関する素描を終えることにするが、これまで文献史学(原島)と考古学(金井塚)の協力によって唱えられてきた仮説を、歴史地理学の立場から、神社の方位信仰という視点を入れることによって、より補強することができたように思う。

しかし金井塚説の最大の問題点は、森田¹¹⁹⁾が批判したように、壬生吉志の本貫地であると考えられる難波の地に、現在までのところ、胴張り型の石室が確認されていないことである。そこで、眼を転じて全国的な胴張り型石室の分布状況を見ると、最も代表的な地域として、九州の筑後川流域と、四国の吉野川流域が挙げられる。いずれも吉志集団の存在は確認されていない地域であるが、ここで武蔵をも含めた3つの胴張り型石室が分布する地域に共通する地名がある。それが「ミヌマ」である。

筑後川流域の胴張り型石室では、筑前朝倉郡の孤塚古墳や、筑後浮羽郡の古畑・寺徳・塚花塚・鳥船塚・珍敷塚・日ノ岡古墳などが知られる¹²⁰⁾が、たとえば珍敷塚古墳は、いわゆる「太陽の船」を描いた代表的な装飾古墳である。この下流に当たる筑後国三潞郡は、『日本書紀』神代上、第6段（一書第3）等に見える水沼君の本拠地であり、同郡には『和名抄』に「夜開郷」の郷名もあり興味深い。また大和¹²¹⁾は、三井郡の高良大社の祭祀氏族は、水沼君であったとする。なお、折口¹²²⁾は、『日本書紀』一書第3に、水沼君が宗像三女神を奉斎したとあることから、水沼君の信仰は、航海の要所にあつて勢力が拡大した宗像三女神の信仰に、その性格が似通っていたために習合したと見る。大和¹²³⁾は、天慶7(944)年の『筑後国神名帳』¹²⁴⁾によれば、三潞郡周辺に「宗形」を名乗る神社が多く見られることを指摘しており、筆者も旧稿¹²⁵⁾において、かつての見沼の名残である氷川神社の神池の中の弁天島に宗像神社が祀られ、またそれとは別に見沼周辺には7社の宗像社があり、「見沼の七弁天」と称されていることを述べたことがある。

最近、辰巳和弘¹²⁶⁾は、大宮市東宮下から出土した男子人物埴輪半身像の胸に線刻された鱗文について、除魔の呪的文様である「胸形」ではないかとしている。辰巳は、これについて、直接ムナカタ氏や海人族との関連は見出せないとして、本来、海人族が除魔の目的をもって胸にする入墨文様であった鱗文が、やがて海人族以外の人々の間にも広まっていったのではないかとするが、まさにこの東宮下は、見沼に面した地であり、当時、見沼から河川を下って東京湾へ出ることは容易であったと考えられるから、大いに宗像氏や海人族との関係を想定してよいと思われる。

一方、吉野川流域¹²⁷⁾については、段の塚穴型と呼ばれる、平面プランが胴張りもしくは末広がり横穴式石室が25基確認されているが、それらは阿波国美馬郡に位置し、同郡には式内社として、弥都波能売神社の名が見える。また、東接する麻植郡には、段の塚穴型とよく似た、

やはり胴張りの忌部山型横穴式石室が23基確認されているが、同郡にも式内社として、天水沼間比古神・天水塞比売神社が存在する。

このように、典型的な胴張り型石室が分布する地域に「ミヌマ」地名が存在することは注目され、既に述べたように「ミヌマ」が天之日矛に関わる地名であるとするれば、やはり渡来人との関係が想定されるようである。

(国学院大学・院)

〔注〕

- 1) 山田安彦(1986):『古代の方位信仰と地域計画』古今書院, 1~290頁。
- 2) 木本雅康(1992):氷川神社の方位と信仰, 国学院雑誌, 93-8, 23~35頁。
- 3) 折口博士記念古代研究所編(1967):『折口信夫全集 第16巻』中央公論社, 407~416頁。
- 4) 三谷栄一(1982):信仰伝承論—まれびとと二元論の立場から—(日本民族研究大系編集委員会編『信仰伝承』国学院大学) 33~64頁。
- 5) 原島礼二(1985):武蔵国造の争乱と比企地方(市史編さん課編『東松山市の歴史 上巻』東松山市) 252~278頁。
- 6) 井上辰雄(1980):『古代王権と宗教的部民』柏書房, 9~54頁。
- 7) 鎌田東二(1988):『翁童論』新曜社, 401~403頁。
- 8) 埼玉県神社庁神社調査団編(1992):『埼玉の神社 大里・北葛飾・比企』埼玉県神社庁, 1262~1265頁。
- 9) 埼玉県編(1982):『新編埼玉県史 資料編2』埼玉県, 307~309頁。
- 10) 『寧楽遺文』中巻, 414頁。
- 11) 大塚口承(1979):古代安刀郷に関する一考察(『坂戸市史調査資料第4号 坂戸風土記』坂戸市教育委員会) 36~40頁。
- 12) 稲村坦元編(1970):『新訂増補埼玉叢書 第3巻』国書刊行会, 441~450頁。
- 13) 下村克彦(1992):世界最古の口琴—大宮市・氷川神社東遺跡—, 埼玉自治, 498, 58~61頁。
- 14) 高橋一夫(1975):埼玉県伊奈町大山製鉄遺跡

- の調査, 考古学ジャーナル, 112, 16~19頁。
- 15) 青木義脩 (1984): 『氷川女体神社』さきたま出版会, 13~17頁。
 - 16) 谷川健一 (1979): 『青銅の神の足跡』集英社, 83~123頁。
 - 17) 浦和市総務部市史編さん室編 (1980): 『浦和市史 民俗編』浦和市, 798頁。
 - 18) 国書刊行会編 (1964): 『系図綜覧 下巻』名著刊行会, 465頁。
 - 19) 『続群書類従』第8輯上, 41頁。
 - 20) 埼玉県県民部県史編さん室編 (1982): 『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県県民部県史編さん室, 65~69頁。
 - 21) 大和岩雄 (1983): 『天照大神と前方後円墳の謎』六興出版, 197~201頁。
 - 22) 『大日本古文書』編年之2, 201~247頁。
 - 23) 秋本吉郎校注 (1958): 『風土記』岩波書店, 202~203頁。
 - 24) 前掲23)。
 - 25) 田中 卓 (1986): 『日本国家の成立と諸氏族』国書刊行会, 27~129頁。
 - 26) 井上光貞 (1951): 国造制の成立, 史学雑誌, 60-11, 1~42頁。
 - 27) 前掲6), 37~38頁。
 - 28) 前掲21)。
 - 29) 『大日本古文書』編年之1, 586~604頁。
 - 30) 前掲23), 192~193頁。
 - 31) 西角井正慶 (1966): 『古代祭祀と文学』中央公論社, 128頁。
 - 32) 式内社研究会編 (1983): 『式内社調査報告 第20巻』皇学館大学出版部, 752~756頁。
 - 33) 折口博士記念古代研究所編 (1965): 『折口信夫全集 第2巻』中央公論社, 80~109頁。
 - 34) 前掲32), 185, 191頁。
 - 35) 井上辰雄 (1970): 『火の国』学生社, 154頁。
 - 36) 田邊哲夫 (1956): 玉名郡倉址と推定される肥後立願寺の遺構, 熊本史学, 10, 1~11頁。
 - 37) 神道大系編纂会編 (1989): 『神道大系 神社編 47 宇佐』神道大系編纂会, 381~418頁。
 - 38) 井上辰雄 (1975): 菊池川流域の古代祭祀遺跡—岩倉と隠りの穴—, 東アジアの古代文化, 5, 94~105頁。
 - 39) 前掲38), 所引。
 - 40) 栃木県文化振興事業団編 (1987): 『下野国府跡VII』栃木県文化振興事業団, 111~120頁。
 - 41) 栃木県文化振興事業団編 (1982): 『下野国府跡IV』栃木県教育委員会, 58~63頁。
 - 42) 名古屋市博物館 (1992): 『和名類聚抄』名古屋市博物館, 100頁。
 - 43) 『鎌倉遺文』3960号。
 - 44) 前掲6), 34頁。
 - 45) 木下 良 (1987): 国府の歴史地理的諸問題, 古代を考える, 45, 70頁。
 - 46) 原島礼二 (1977): 『日本古代王権の形成』校倉書房, 286~389頁。
 - 47) 金井塚良一 (1980): 『古代東国史の研究』埼玉新聞社, 225~339頁。
 - 48) 原島礼二 (1974): 『日本書紀』のミヤケ設置記事, 古代文化, 26, 22~32頁。
 - 49) 前掲46), 367頁。
 - 50) 市史編さん課編 (1978): 『東松山市と周辺の古代』東松山市, 12~32頁。
 - 51) 吉田 晶 (1982): 『古代の難波』教育社, 114~115頁。
 - 52) 前掲8)。
 - 53) 大和岩雄 (1989): 『神社と古代王権祭祀』白水社, 448頁。
 - 54) 『大日本古文書』編年之4, 451~452頁。
 - 55) 吉田東伍 (1900): 『増補 大日本地名辞書』富山房, 504~505頁。
 - 56) 江南町千代遺跡群発掘調査会編 (1992): 「寺内古代寺院跡資料」(現地説明会資料)江南町千代遺跡群発掘調査会。
 - 57) 『大日本古文書』巻之13, 220頁。
 - 58) 平凡社地方資料センター編 (1986): 『大阪府の地名II』平凡社, 69頁。
 - 59) 『大日本史料』第1編之7, 169頁。
 - 60) 『平安遺文』3298号。
 - 61) 埼玉県編 (1983): 『新編埼玉県史 資料編4』埼玉県, 294~295頁。
 - 62) 池上 悟 (1980): 東国における胴張り石室の様相, 立正史学, 47, 63~90頁。

- 63) 森田 悌 (1988) : 『古代の武蔵』吉川弘文館, 51~78頁。
- 64) 水谷慶一 (1981) : 『続・知られざる古代』日本放送出版協会, 271~273頁。
- 65) 前掲46), 381頁。
- 66) 前掲55), 546頁。
- 67) 前掲64), 267~268頁。
- 68) 前掲50), 17頁。
- 69) 前掲47), 324頁。
- 70) 金井塚良一編 (1989) : 『古代東国の原像』新人物往来社, 149頁。
- 71) 式内社研究会編 (1977) : 『式内社調査報告 第5巻』皇学館大学出版部, 308~313頁。
- 72) 前掲54)および『大日本古文書』編年之5, 702頁。
- 73) 原島礼二 (1980) : 古代の多摩と渡来氏族, 多摩のあゆみ, 20, 64~68頁。
- 74) 三品彰英 (1972) : 『増補日鮮神話伝説の研究』平凡社, 27~35頁。
- 75) 三浦圭一 (1957) : 吉士について—古代における海外交渉—, 日本史研究, 34, 30頁。
- 76) 岸 俊男 (1966) : 『日本古代政治史研究』塙書房, 92~134頁。
- 77) 和歌山県史編さん委員会編 (1981) : 『和歌山県史 古代史料1』和歌山県, 619頁。
- 78) 『角川日本地名大辞典』編纂委員会編 (1985) : 『角川日本地名大辞典30 和歌山県』角川書店, 333~334頁。
- 79) 『大日本古文書』編年之25, 131頁。
- 80) 『平安遺文』265号。
- 81) 前掲6), 35頁。
- 82) 神道大系編纂会編 (1979) : 『神道大系 神宮編1』神道大系編纂会, 395~483頁。
- 83) 前掲46), 381頁。
- 84) 前掲64), 13頁。
- 85) 林屋辰三郎 (1960) : 『中世芸能史の研究』岩波書店, 152頁。
- 86) 前掲46), 381頁。
- 87) 前掲55), 487頁。
- 88) 前掲6), 21, 30頁。
- 89) 前掲6), 19頁。
- 90) 前掲6), 19頁。
- 91) 『鎌倉遺文』5512号。
- 92) 前掲29), 97~142頁。
- 93) 前掲46), 378頁。
- 94) 森田 悌 (1989) : 武蔵国足立郡と丈部直, 地方史研究, 221, 84~86頁。
- 95) 前掲61), 199頁。
- 96) 前掲73), 67頁。
- 97) 井上光貞 (1986) : 『井上光貞著作集 第5巻』岩波書店, 405~433頁。
- 98) 前掲70), 138~139頁。
- 99) 前掲5), 252~278頁。
- 100) 前掲99), 269頁。
- 101) 井上薫教授退官記念会編 (1980) : 『日本古代の国家と宗教 上巻』吉川弘文館, 61~83頁。
- 102) 志田諄一 (1985) : 『古代氏族の性格と伝承』雄山閣, 114~121頁。
- 103) 佐伯有清 (1985) : 『日本古代氏族の研究』吉川弘文館, 1~60頁。
- 104) 上田正昭 (1968) : 『日本古代国家論究』塙書房, 243頁。
- 105) 松前 健 (1963) : 日置部の一考察, 神道宗教, 32, 22~35頁。
- 106) 前掲35), 156頁。
- 107) 埼玉県編 (1987) : 『新編埼玉県史 通史編1』埼玉県, 362~363頁。
- 108) 前掲107), 436~437頁。
- 109) 笹森紀己子 (1991) : 大宮の古墳—側ヶ谷戸古墳群・植水古墳群の検討を中心に—, 大宮市立博物館研究紀要, 3, 6~19頁。
- 110) 前掲6), 9~54頁。
- 111) 前掲4), 33~64頁。
- 112) 守屋美都雄訳注 (1978) : 『荊楚歳時記』平凡社, 228~231頁。
- 113) 大和岩雄 (1981) : 巨木伝承と冬至線—古代王権と太陽祭祀(4)—, 東アジアの古代文化, 27, 118~140頁。
- 114) 柳田国男 (1962) : 『定本 柳田国男集 第9巻』筑摩書房, 331~424頁。
- 115) 折口博士記念古代研究所編 (1970) : 『折口信夫全集 ノート編 第2巻』: 中央公論社, 101~109

- 頁。
- 116) 水谷慶一 (1980) : 『知られざる古代』日本放送出版協会, 176~179頁。
- 117) 東原那美 (1987) : 『白山神社と太陽信仰の研究—白山と伊勢神宮の関係を中心として—, 東村山市史研究, 3, 327頁。
- 118) 前掲117), 327~328頁。
- 119) 前掲63)。
- 120) 小田富士雄 (1979) : 『九州考古学研究 古墳時代篇』学生社, 380~383頁。
- 121) 前掲53), 367~390頁。
- 122) 前掲33)。
- 123) 前掲53)。
- 124) 『続群書類従』第3輯上, 213~219頁。
- 125) 前掲2)。
- 126) 辰巳和弘 (1992) : 『埴輪と絵画の古代学』白水社, 67~71頁。
- 127) 森 浩一 (1990) : 『文字と都と駅』中央公論社, 28~32頁。

〔付記〕

本稿は歴史地理学会第35回大会 (1992年 5月16日, 千葉大学教育学部) において発表した内容に, 加筆訂正したものである。なお, 清書中に森田悌 (1992) : 『古代東国と大和政権』新人物往来社, が出版された。本稿の内容と密接に関わる部分があるが, 後考に期したい。

HIOKI, MIBU-NO-KISHI AND HIKAWA SHRINES : ONE EXAMPLE
OF THE ANCIENT DIRECTION FAITH
Masayasu KIMOTO

My former paper 'Direction and faith on arrangement of the three Hikawa-shrines in Saitama Prefecture' ("Kokugakuin Zasshi" 93-8, 1992) concludes that three shrines, Hikawa Nantai-and Nyotai-shrines and their son Hikawa Oji shrine near the Minuma swamp in Adachi-gun, Musashi-no-kuni (part of Saitama Pref.), were arranged on the same line related with the sunrise and sunset directions in the solstice. In this paper, meanings and the historico-geographical background of this line are to be interpreted.

This line is directed to Hiki-gun, Musashi-no-kuni (part of Saitama Pref.), and has some connection with ancient Hioki-shi(Hioki-family) or Hioki-be(people ruled by Hioki-family). In the regions where Hioki-group settled as Izumo(Shimane Pref.), Higo(Kumamoto Pref.), and Shimotuke(Tochigi Pref.), are reported some examples of the arrangement of shrines or sacred places on the line connected with the similar solstice directions. The region including Hiki-gun was the place where Mibu-no-kishi (one branch of the group from Korea) settled. It was a branch of Naniwa-no-kishi, and the similar combination of the characteristic place-name between Naniwa and northern Musashi, is reported. The sunrise in winter solstice can be seen on the direction from the former location of Ikashiri-shrine (one of the great bases of Kishi-group) to Mt. Takayasu, Yamato. One group of Kishi had settled in Tsuge-go in Hiki-gun, Musashi, from where Minuma is in the direction of the sunrise of winter solstice.

The location of three Hikawa shrines seems to be related with Hioki and Mibu-no-kishi. The fact that the distributions of those two groups were often overlapped each other, suggests the close relation between them. It is certain that the Hikawa shrines was enshrined by the Hasetsukabe-no-atae family in Adachi-gun, which family also related with the Kishi -family under the intermediate of Abe-family.

The concluding remarks are as follows ; Hioki and Mibu-no-kishi groups under Abe group, settled into the Hiki and Yokomi region as the front army of the Yamato Dynasty, then they enshrined and arranged these three Hikawa shrines on the line of the sunrise of the winter solstice, and sent Hasetsukabe group as the priests. Three shrines, carefully arranged on the same direction, symbolise the intension of the dynasty to control the calendar and the native sun-worship power itself.